

2010 年度第 2 回 FD 研究会の開催報告について

英国の University of Wolverhampton で高等教育開発に携わっている Prof. Glynis Cousin (Director of Institute for Learning Enhancement and of Centre for Excellence in Teaching and Learning) と Dr Helen Gale (Associate Dean of Teaching and Learning) をお招きし、学内ワークショップと公開シンポジウムを開催した。

1. フリーセッション

12月2日(木) 16:00～(G館5階会議室)

9名の教職員が参加した。Prof. Glynis Cousin から「教員に変化を強要することはよくない。まずは学生に対して教育に期待することを尋ねてみる。学生からの声を教員の話合いのベースとして使うことが大切。FD はゆっくりと着実に進めるべきもの」という提言があった。FD は教育を画一化するものではなく、学生の声から多様な方略への展開を図っていくという考え方である。Dr Helen Gale からは、豊かな学習環境を創ること(例えば、対面での学びの環境と技術を融合した空間など)、学生との良好な関係を創ること、初任教員への研修、教育目標(期待される学びの成果)の設定などについて実践を紹介いただき、意見交換を行った。

2. ワークショップ

12月3日(金) 16:30～(G館5階会議室)

11名の教職員が参加した。あらかじめ、本学の3つの授業(「英文構成法」(水島先生)、「労働法」(家田先生)、「子どもの権利と教育」(富田先生))を参観いただき、これにもとづき参加者とディスカッションを行った。表面的な知識を記憶する学生を探求的な学び手(Deeper Learner)に変革する授業方略、入学後最初の12週間で「自分が学生であること」を自覚させることの意義、学生自身の自己評価を取り入れることの教育的効果、学びを接合するために学生中心の考え方でカリキュラムを連携することの重要性、といったテーマについて意見交換を行い、本学における授業改善、FDに関する課題認識を深めることができた。



3. シンポジウム「イギリスと日本における先進的 FD 事例に学ぶ」(総合研究所との共催)

12月4日(土) 13:00～(G館SGUホール)

学内外から約40名の参加があった。講演に引き続きパネルディスカッションでは、英国と日本のFD専門家養成に関するアプローチの違い、FDへの学生参画等について会場との質疑応答、意見交換を行った。



Prof. Glynis Cousin

FDの推進にあたっては学生の現状を徹底的にリサーチし、問題点やニーズを可視化するプロセスが重要である(FDはリサーチ活動である)。教員顕彰制度の導入も有効である。授業では数少ないコンテンツに絞り、学生に深く考えさせるべき。教員は、あまりにも多くのコンテンツを教え込もうとしている。学生の経験を授業に取り入れ、学生間の相互作用を促すなど学生を学びの主体に位置づけることが重要である。



Dr. Helen Gale

施設、設備の観点から学習環境を設計することが重要である。学びの場は講堂に限定されるものではない。キャンパス内のあらゆる場所で学生の学びを促す環境デザインが求められる。また、ICT(情報コミュニケーション技術)を取り入れ、対面学習との融合(Blended Learning)を図ることも効果的である。



佐藤浩章氏(愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室副室長・准教授)

愛媛大学では、学部学科に「教育コーディネーター」を置いている。教育コーディネーターは、学部学科の推薦により学長が任命する「教育の責任者」である。従来の教務委員は教務事項のルーチンワークに追われ、教育改善の役割を担うことができなかった。教育コーディネーターは、教育内容・教授法の改善、教育効果の検証などを担うキーパーソンといえる(全教員の約1割が教育コーディネーター)。これを養成する研修プログラムは、教育企画室(高等教育開発の専門家で構成)が企画、運営する。愛媛大学では、教育担当副学長、FD担当者、学部学科(個々の教員)というアクターに加え、この教育コーディネーターがアクターとして関与し、組織的な連携にもとづく全学的な教育改善に取り組んでいる。

